

# 教育実習が学生の意識に及ぼす影響 (I)

佐伯英人

The Influence of the Teaching Practicum on University Student's Consciousness (I)

Hideto SAIKI

(Received September 28, 2007)

キーワード：教育実習、学生の意識、所属している課程の違い、実習校の違い、性別

## I はじめに

### (1) 所属している課程の違いについて

山口大学教育学部では、学校教員の養成および社会のさまざまな分野において教育の素養をもって貢献できる人材の育成を行っている。そのため、従来の学校教員養成課程の他に、実践臨床教育課程、情報科学教育課程、健康科学教育課程、総合文化教育課程の4つの課程を設置している。本論文では、学校教員養成課程を「養成課程」と称し、先に述べた4つの課程をあわせて「非養成課程」と称する。なお、養成課程の学生は、卒業要件として教員免許を取得する必要がある。そのため、全員、教育実習に参加する。一方、非養成課程の学生は卒業要件として教員免許を取得する必要がない。そのため、教員免許を取得する希望がある学生のみが教育実習に参加する。

### (2) 教育実習について

教育実習について本学部のカリキュラムでは、2年次に参加実習と参観実習、3年次に基本実習（前期実習と後期実習）、4年次に応用実習（別名：委託校実習）を行うようになっていく。また、この他に2～4年の間に社会福祉施設での介護等体験実習を行うようになっていく。各実習の概要を以下に示す。

2年次に行う参加実習は、附属特別支援学校の行事などに2日間、参加し、手伝をするというものである。また、参観実習は、3年生が行っている基本実習（後期実習）の一部を1～3日間、見学し、現場の雰囲気を体感・学習するというものである。

3年次の基本実習は、前期実習2週間と後期実習3週間の合計5週間、附属小・中学校において行っている。基本実習の目的は、教師としての実践力やその他の資質を身につけることにあり、この間、学生は教育実習生として実際に授業を行ったり、行事・学級経営に参加したりする。非養成課程の学生の場合、この基本実習は前期・後期のどちらかの2週間で行っている。なお、本学部の特記事項として附属小学校が2校、附属中学校が2校の合計4校ある。以下、本論文では実習校をA小学校、B中学校、C小学校、D中学校と称する。

4年次の応用実習は、県下の公立小・中学校が委託校となり、2週間、行っている。

また、社会福祉関係の施設での介護等体験実習は、5日間、行っている。

各実習の概要については基本的に以上のとおりであるが、所属するコース等によって多少の違いがあることを付記しておく。

## Ⅱ．問題の所在と研究の目的

今栄・清水（1994）は「教育実習の教員志望動機に対する影響に関する研究は、結論が一致していない。」と述べ、次の①～⑤を不一致の主な理由としてあげている。

- ① 教育実習の条件が大学によって異なること
- ② 実習が附属学校を中心に実施されているか、一般協力学校が主であるか
- ③ 実習学生の学年の違い
- ④ 実習期間の長短
- ⑤ 研究実施年代の違い

このことは、大学によって教育実習の在り方などが異なるため、学生の意識に及ぼす影響が異なって表出することを意味している。つまり、教育実習が及ぼす影響については個別に検証する必要があるということを示唆している。

先に述べたように現在、本学部には、養成課程と非養成課程という異なる課程に所属する学生が存在し、また、複数の実習校（A小学校、B中学校、C小学校、D中学校）がある。そこで、本学部がもっている特徴的な視点（所属している課程の違い・実習校の違い）に立って、教育実習が学生の意識にどのような影響を及ぼしているのかを研究することにした。

なお、本論文においては、性別も重要な視点であると考え、研究することにした。

## Ⅲ 調査の対象と調査の方法

### 1 調査の対象

先に述べたように本学部では3年次に基本実習（2週間の前期実習と3週間の後期実習）を実施している。本論文では、2007年5月28日～6月8日に行われた前期実習を研究の対象とした。なお、第3学年の在籍者数は272名（養成課程が124名、非養成課程が148名）であり、その中の145名が前期実習へ参加した。

#### （1）所属している課程の違いによる参加者数

養成課程124名の中で前期実習に参加した者は121名であった。一方、非養成課程148名の中で教員免許の取得希望者は67名であった。その中で高等学校教員免許のみの取得を希望する2名と後期の基本実習に参加する予定の41名を除いた24名が、この前期実習へ参加した。つまり、前期実習へ参加した145名のうちわけは養成課程が121名、非養成課程が24名ということである。

#### （2）実習校の違いによる参加者数

本学部には附属小・中学校が合計4校（A小学校、B中学校、C小学校、D中学校）ある。学生の受け入れ人数は、A小学校に36名、B中学校に48名、C小学校に35名、D中学校に26名であった。

#### （3）性別による参加者数

前期実習に参加した145名を性別でみると男性は67名、女性は78名であった。

### 2 調査の方法

前期実習の参加者145名に対し、実習を終了した時点で質問紙による調査を実施した。質問項目は、教育実習が学生の意識にどのような影響を及ぼすのかを測定する目的で自作した（表2）。質問紙では「次の項目について、あなたが教育実習をして感じていることや思っていることを教えてください。それぞれの質問において、あてはまる番号に一つずつ○をつけてくだ

さい。」という教示を行い、5件法で回答を求めた。5件法は「まったくあてはまらない(1点)、あまりあてはまらない(2点)、どちらともいえない(3点)、だいたいあてはまる(4点)、とてもあてはまる(5点)」とした。また、回答者の所属、実習校名、性別といった属性について回答してもらった。なお、この後に実施される後期実習の影響について調べる予定であるため(後に反復測定を実施する予定があるため)、氏名を書いてもらった。

## IV 分析の方法と分析の結果

### 1 素集計の方法と結果

素集計には統計解析プログラム SPSS for Windows 10.0を使用した。前期実習に参加した145名中、回答者は142名であった。回答者の属性を表1に示す。

表1 回答者の属性

	グループ	人数
所属	養成課程	118
	非養成課程	24
実習校	A小学校	33
	B中学校	48
	C小学校	35
	D中学校	26
性	男性	66
	女性	76

### 2 因子分析の方法と結果

因子分析には統計解析プログラム SPSS for Windows 10.0を使用した。なお、因子抽出法には最尤法を用いた。因子数の決定に当たっては、「因子分析最尤法結果に RMSEA など適合度指標をプラス script」と「因子分析の因子数決定法 script」の2つのスクリプト(<http://www.ec.kagawa-u.ac.jp/~hori/spss/spss.html#nfactors>)を使用し、得られた検定結果を基にした(堀, 2005)。そして、因子の回転(Promax回転)を行い、因子負荷量の低い項目(絶対値0.40未満)を削除し、再度、因子分析を行った。この手順を因子負荷量の低い項目がなくなるまで繰り返した。このようにして得られた4因子を「授業づくりや教師の仕事におもしろさを感じ、教師になりたいと思う心」、「さらに自己を高めようとする心」、「教育活動をする事の難しさやたいへんさを感じる心」、「子どもとかかわる事の楽しさやおもしろさを感じる心」と命名し、尺度とした(表2・3)。

さらに各尺度の内的整合性を検討するために Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、「授業づくりや教師の仕事におもしろさを感じ、教師になりたいと思う心」は  $\alpha = 0.86$ 、「さらに自己を高めようとする心」は  $\alpha = 0.82$ 、「教育活動をする事の難しさやたいへんさを感じる心」は  $\alpha = 0.70$ 、「子どもとかかわる事の楽しさやおもしろさを感じる心」は  $\alpha = 0.82$ であった。

表2 因子分析の結果

	因子負荷量			
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
授業をするのは楽しい。	0.78	0.12	-0.01	-0.04
将来、教師としてやっていけそう。	0.77	-0.07	-0.15	0.01
自分は教師という仕事に向いている。	0.75	-0.05	-0.18	-0.05
授業をするのはおもしろい。	0.74	0.06	0.07	0.10
授業づくりのおもしろさが分かった。	0.63	-0.03	0.16	-0.12
教師になりたい。	0.59	0.01	0.13	0.10
授業をうまく展開することができた。	0.49	0.00	-0.31	-0.05
教師の仕事はおもしろい。	0.49	0.06	0.23	0.18
教育実習に行った学校種の教師になりたい。	0.44	-0.07	0.23	0.09
自分に自信がもてた。	0.42	0.09	-0.32	0.04
今後、大学で授業や研究以外の活動を頑張ろうと思う。	-0.03	0.92	-0.13	-0.07
今後、大学以外の場での活動を頑張ろうと思う。	0.01	0.80	-0.13	-0.10
今後、大学で研究を頑張ってしようと思う。	0.02	0.64	-0.02	0.09
今後、大学の授業を頑張ってうけようと思う。	0.00	0.62	0.03	0.11
今後、自分の教養を広めようと思う。	0.09	0.47	0.31	-0.01
難しかった。	0.10	-0.07	0.77	-0.05
授業づくりの難しさが分かった。	0.02	0.05	0.68	0.07
教師の仕事は、たいへんだ。	-0.01	-0.21	0.63	0.02
授業をするのは、難しい。	-0.03	0.00	0.54	0.17
自分の勉強不足を感じる。	-0.05	0.33	0.46	-0.05
子どもとかかわるは、難しい。	0.16	-0.01	0.43	-0.33
しんどかった。	-0.13	0.05	0.41	-0.17
子どもとかかわるのは、楽しい。	-0.03	0.06	0.01	0.95
子どもとかかわるのは、おもしろい。	-0.06	0.11	-0.03	0.94
以前より子どもが好きになった。	0.13	-0.07	0.02	0.63
子どもとうまくかかわることができた。	0.11	-0.20	-0.15	0.52

(最尤法・Promax 回転)

表3 因子相関行列

因子	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子	1.00	0.26	-0.08	0.52
第2因子	0.26	1.00	0.34	0.24
第3因子	-0.08	0.34	1.00	0.21
第4因子	0.52	0.24	0.21	1.00

(最尤法・Promax 回転)

### 3 t検定及び分散分析の方法と結果

#### (1) t検定及び分散分析の方法

先の因子分析で抽出した4つの尺度の得点は、最低得点を0とするために、各項目の合計得点から項目数を引いて算出した。つまり、「授業づくりや教師の仕事におもしろさを感じ、教師になりたいと思う心」の場合は10項目、回答は5件法（1点～5点）であるため、最低得点

が0点(得点の和の最低値10-項目数10)、最高得点が40点(得点の和の最高値50-項目数10)となる。「さらに自己を高めようとする心」の場合は5項目、回答は5件法(1点~5点)であるため、最低得点が0点(得点の和の最低値5-項目数5)、最高得点が20点(得点の和の最高値25-項目数5)となる。「教育活動をする事の難しさやたいへんさを感じる心」の場合は7項目、回答は5件法(1点~5点)であるため、最低得点が0点(得点の和の最低値7-項目数7)、最高得点が28点(得点の和の最高値35-項目数7)となる。「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」の場合は4項目、回答は5件法(1点~5点)であるため、最低得点が0点(得点の和の最低値4-項目数4)、最高得点が16点(得点の和の最高値20-項目数4)となる。

そして、これらの得点をもとに所属している課程の違い、実習校の違い、性別に着目して分析した。所属している課程の違い、性別については、それぞれ対応のないt検定を行った。また、実習校の違いについては1要因分散分析を行った。分析には統計解析プログラムSPSS for Windows 10.0を使用した。

(2) t検定及び分散分析の結果

1) 所属している課程の違いによる意識の得点比較

所属している課程の違いによる意識の得点を比較するために尺度ごとに対応のないt検定を行った。

なお、等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、「さらに自己を高めようとする心」において等分散が仮定された。しかし、「授業づくりや教師の仕事におもしろさを感じ、教師になりたいと思う心」、「教育活動をする事の難しさやたいへんさを感じる心」、「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」においては、いずれも等分散が仮定されなかった。

対応のないt検定を行った結果を表4に示す。

「教育活動をする事の難しさやたいへんさを感じる心」について養成課程と非養成課程の間に有意な差が認められた ( $t(42.77) = 2.36, p < 0.05$ ; 非養成課程 > 養成課程)。

表4 所属している課程の違いによる意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値 (標準偏差)	t値	有意確率	p
授業づくりや教師の仕事におもしろさを感じ、教師になりたいと思う心	養成課程	117	28.12	25.31(5.50)	0.83	0.41	n.s.
	非養成課程	24		23.96(7.61)			
さらに自己を高めようとする心	養成課程	118	140	16.47(3.11)	1.21	0.23	n.s.
	非養成課程	24		17.29(2.77)			
教育活動をする事の難しさやたいへんさを感じる心	養成課程	118	42.77	24.19(2.89)	2.36	0.02	*
	非養成課程	24		25.38(2.10)			
子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心	養成課程	116	27.52	13.14(2.17)	0.69	0.50	n.s.
	非養成課程	24		12.67(3.20)			

\*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$  \*\*\*  $p < 0.001$

## 2) 実習校の違いによる意識の得点比較

実習校の違いによる意識の得点を比較するために尺度ごとに1要因分散分析を行った。

なお、等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、「授業づくりや教師の仕事におもしろさを感じ、教師になりたいと思う心」、「さらに自己を高めようする心」、「教育活動をすることの難しさやたいへんさを感じる心」において、いずれも等分散が仮定された。しかし、「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」においては等分散が仮定されなかった。

1 要因分散分析を行った結果を表5に示す。

「さらに自己を高めようする心」について実習校の間に有意な差が認められた ( $F(3,138) = 3.43, p < 0.05$ )。等分散が仮定されたため、Tukeyの方法を用いて多重比較を行った。その結果、A小学校とD中学校の間に有意な差が認められた ( $p < 0.05$ ; D中学校 > A小学校)。

また、「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」について実習校の間に有意な差が認められた ( $F(3,136) = 2.90, p < 0.05$ )。等分散が仮定されなかったため、Games-Howellの方法を用いて多重比較を行った。その結果、A小学校とB中学校の間に有意な差が認められた ( $p < 0.05$ ; A小学校 > B中学校)。

表5 実習校の違いによる意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値 (標準偏差)	F値	有意確率	p
授業づくりや教師の仕事におもしろさを感じ、教師になりたいと思う心	A小学校	33		25.00(5.21)	0.21	0.89	n.s.
	B中学校	48	3	24.77(6.08)			
	C小学校	35	137	25.00(6.08)			
	D中学校	25		25.92(6.42)			
さらに自己を高めようする心	A小学校	33		15.67(2.98)	3.43	0.02	*
	B中学校	48	3	17.10(2.75)			
	C小学校	35	138	15.94(3.70)			
	D中学校	26		17.77(2.21)			
教育活動をするものの難しさやたいへんさを感じる心	A小学校	33		23.67(3.11)	1.70	0.17	n.s.
	B中学校	48	3	25.04(2.44)			
	C小学校	35	138	24.17(2.82)			
	D中学校	26		24.38(2.86)			
子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心	A小学校	32		14.00(1.52)	2.90	0.04	*
	B中学校	47	3	12.47(2.68)			
	C小学校	35	136	13.17(2.33)			
	D中学校	26		12.81(2.42)			

\*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$  \*\*\*  $p < 0.001$

## 3) 性別による意識の得点比較

性別による意識の得点を比較するために尺度ごとに対応のないt検定を行った。

なお、等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、4つの尺度において、いずれも等分散が仮定された。

対応のないt検定を行った結果を表6に示す。

「子どもとかかわることの楽しさやおもしろさを感じる心」について男性と女性の間

な差が認められた ( $t(138)=2.43, p<0.05$ ; 男性>女性)。

表6 性別による意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値 (標準偏差)	t値	有意確率	p
授業づくりや教師の仕事におもしろさを感じ、教師になりたいと思う心	男性	66	139	26.10(5.18)	1.94	0.05	n.s.
	女性	75		24.19(6.37)			
さらに自己を高めようとする心	男性	66	140	16.47(3.01)	0.49	0.62	n.s.
	女性	76		16.72(3.12)			
教育活動をする事の難しさやたいへんさを感じる心	男性	66	140	24.56(2.72)	0.69	0.49	n.s.
	女性	76		24.24(2.87)			
子どもとかかわる事の楽しさやおもしろさを感じる心	男性	64	138	13.58(1.97)	2.43	0.02	*
	女性	76		12.62(2.59)			

\*  $p<0.05$  \*\*  $p<0.01$  \*\*\*  $p<0.001$

## V 研究のまとめ

### 1 所属している課程の違いについて

「教育活動をする事の難しさやたいへんさを感じる心」について養成課程と非養成課程の間に有意な差が認められ、非養成課程の得点が養成課程の得点よりも高かった。

養成課程と非養成課程では大学におけるカリキュラムが異なっている。養成課程の学生は、入学以来、学校教員を養成する目的でカリキュラムが生まれ、学んできている。しかし、非養成課程の学生は必ずしも学校教員を養成する目的で組まれたカリキュラムで学んできていない。この意識の得点の違いは、大学のカリキュラムの違いに起因している可能性がある。

### 2 実習校の違いについて

「さらに自己を高めようとする心」について実習校の間に有意な差が認められた。多重比較を行った結果、A小学校とD中学校の間に有意な差が認められ、D中学校の得点がA小学校の得点よりも高かった。また、「子どもとかかわる事の楽しさやおもしろさを感じる心」について実習校の間に有意な差が認められた。多重比較を行った結果、A小学校とB中学校の間に有意な差が認められ、A小学校の得点がB中学校の得点よりも高かった。

このことは実習校によって教育効果が異なって表出したことを意味している。この意識の得点の違いは、各学校における教育実習のあり方に起因している可能性がある。

### 3 性別について

「子どもとかかわる事の楽しさやおもしろさを感じる心」について男性と女性の間で有意な差が認められ、男性の得点が女性の得点よりも高かった。

このことは教育実習中の学生と子どもとのかかわり方に起因しているものと思われる。この教育実習では男性が女性よりも子どもたちとうまくかかわることができたことを示唆している。

## VI おわりに (今後の課題)

所属している課程の違い、実習校の違い、性別によって学生の意識に差異がみられることが

分かった。学生の意識に差異をもたらした要因については、今後、多面的な視点から研究を続け、明らかにしていきたい。また、学生が今後、後期実習や応用実習に参加する中で、どのように変容していくのかについても研究して行きたい。そして、研究を通して得られた結果を基に本学部のカリキュラムや教育実習のあり方を検討し、改善を図っていきたい。

#### (謝辞)

ご指導・ご助言いただきました愛媛大学教育学部教授の深田昭三氏、愛知学院大学心身科学部教授の千野直仁氏、鶴見大学歯学部准教授の石村貞夫氏、香川大学経済学部教授の堀哲造氏に感謝の意を表します。

#### (文献)

- 今栄国晴・清水秀美 (1994) 「教育実習が教員志望動機に及ぼす影響 事前・事後測定法による分析」, 日本教育工学雑誌, 第17巻第4号, p.185-195
- 堀哲造 (2005) 「因子分析における因子数決定法—平行分析を中心にして—」, 香川大学経済論叢, 第77巻第4号, p.35-70